

フィリピン南部ムスリム社会に関する実務者・専門家ワークショップ（概要）

AA 研の海外拠点の一つであるコタキナバル・リエゾンオフィス（KKLO）がこれまで実施してきた東南アジアのムスリム社会に関する共同研究の成果還元と研究交流事業の一環として、2018年9月10日に、JICA フィリピン事務所（在マニラ、フィリピン）において上記の題目によるワークショップを開催した。同企画は大きく分けて以下の二つの項目から構成されるプログラムに沿って実施された。

(1) JICA フィリピン事務所の現地フィリピン人スタッフら関係者向け講義・研修。

(2) 和田義郎所長をはじめとする JICA フィリピン事務所の関係者、及び加納雄大公使をはじめとする在マニラ日本大使館のスタッフら邦人実務関係者・専門家向けの研究報告と意見交換のための勉強会。いずれも KKLO サイドからは KKLO 拠点長の床呂郁哉（AA 研）教授と同拠点の共同研究課題のメンバーである森正美（京都文教大学教授）が参加した。以下に、その概要を述べたい。

まず JICA 事務所現地フィリピン人スタッフら関係者向けに床呂より **Introduction on the Muslim Society in the Southern Philippines** と題してフィリピンにおけるムスリム社会の歴史的背景と社会・文化の概要、そしてミンダナオ紛争の背景と現況に関する報告・講義を実施した。また森は **Legal Pluralism and Gender in Muslim society in the Philippines: Based on the Experiences in Lanao del Sur** と題してイスラーム法とジェンダー概念、およびマラナオ社会を中心とするフィリピン南部のムスリム社会について概説した。受講した JICA の（主にキリスト教徒フィリピン人からなる）現地スタッフからは、ムスリムの多元的法体制についてフィリピン低地社会との比較に基づき共通性や差異を尋ねる質問や、現在のマラウィ占拠以降の復興状況、復興プロセスにおける文化的ファクターの重要性などについて各種の質問が出された。

次に邦人の実務関係者向けの報告として、床呂からは「スールー諸島のムスリムの現況—マレーシア・サバとの関係を中心に」と題してフィリピン南部のスールー諸島のモロ（ムスリム）、とくにタウスグ人、サマ人らの社会に関する報告を行った。ここではスールー諸島の地理的・社会・歴史的背景をはじめとしてスールー諸島とマレーシアの関係（ミンダナオ紛争におけるマレーシアの和平への役割、スールー王国軍事件、スールーのモロのサバへの移民／難民の現状）、そしてバンサモロ組織法（BOL）の実施以降のミンダナオ和平プロセスにおけるスールー諸島のモロ社会が抱える課題とポテンシャルなどに関して報告を実施した。この中で床呂は、ミンダナオ紛争の初期（1970年代）から現在に至るモロ社会とマレーシアの複雑な関係の経緯や、現在のマレーシア・サバ州などで大きな社会問題となっているフィリピン出身のムスリムの移民・難民をめぐる状況について解説した。またミンダナオ和平プロセスに関しては、今後の進捗のなかで「平和の配当」がマギンダナオ人らミンダナオ本島のムスリムだけではなくスールー諸島のタウスグ人、サマ人を含む島嶼部のムスリ

ムにもいかに行きわたるかという点が一つの課題になりうることなどを含め和平プロセスに関する課題であるとか、マレーシア・サバなど近隣の地域との経済交流が現地のモロ社会に潜在的に寄与を果たす可能性などについて述べた

同じく森は「フィリピン・ムスリムの法、ジェンダー：今のラナオからみえること」と題して、フィリピンのムスリム社会に関わる法的側面について概説をした。とくにイスラーム法、慣習法、国家法の関係性について、制度的側面と実践の両面から説明し、複雑な紛争処理の実態の理解を促した。またこれらの法制度の実態が、今般成立したバンサモロ政府における法制度の変革にどのように影響を及ぼすかを考える材料を提供した。また、2017年5月に発生したマラウィ市占拠事件以来2度現地を訪問した経験に基づき、今後のマラウィ復興に際しての留意事項などについて、現地での写真や聞き取りを交えて紹介した。

両者の報告を踏まえてJICAや大使館スタッフからの質疑応答やディスカッションと意見交換が行われた。このように、概してミンダナオ和平に関わる実務家や関係者と直接の対話や質疑応答、意見交換ができたことで、現地の実情に即した復興支援への参考となる成果公開や意見交換の場となり得たと感じると共に、今後とも現地調査などに基づく継続的な研究と成果発信の必要性を実感する機会ともなった。

(文責：床呂郁哉)